

欧米における浄土教研究の紹介

—前掲・英文浄土教関係著作・論文目録について—

研究補助員 ロバート・F・ローズ

近年、特に過去20年ぐらい前から、欧米での浄土教関係の研究が盛んに出版されるようになった。この傾向はアメリカで最も著しいが、徐々に以前より広く深く研究がなされてきたことは、浄土教への関心が大きく高まってきたことを示している。

アメリカに限っていえば、このような浄土教への関心は、特に1960年代から続いている仏教全般、あるいは東洋思想全般に対する興味のひとつの現われと考えられる。現在のアメリカの仏教に対する関心は、主に禅とチベット仏教に集中しているが、研究者の中には浄土教を仏教における中心的信仰形態のひとつと受けとり、研究にとりこんでいる人々が何人かいる。以下、英文で1960年以後発表された欧米の学者による浄土教研究の成果を紹介してゆきたい。欧米の学者の研究論文と共に、日本の学者も多くの勝れた論文を英文で発表しており、これらが欧米の研究者等に大きな影響を与えていることはいうまでもないが、この小論では欧米の研究成果に重点を置き、原則としてそれらには触れないことにする。しかしながら、特に注目すべき成果はとりあげることとしたい。

※以下の〔 〕の中のアラビア数字は著作・論文目録の番号を示す。

1. インド浄土教の研究

1960年以後、英文で発表されたインド仏教の浄土教関係の論文は比較的少ないが、その中には興味深いものがいくつかある。たとえば Paul Harrison には

“Buddhānusmṛti in the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthitā-Samādhi-sūtra” という『般舟三昧経』の念仏 (Buddhānusmṛti) についての研究がある [16]。この論文では、大乘仏教形成期においては、智恵によって自己の解脱を求める般若波羅蜜の流れと、人格化された仏を信仰することによって救済を求める浄土思想の流れは、密接な関係にあったと論じ (p. 35)、『般舟三昧経』はこの二つの流れの関係を示すものであるとする。論文の本文は『般舟三昧経』に見られる念仏について詳しく考察している。特に興味深いのは、この經典において繰り返し阿弥陀仏に言及していることは、発達した阿弥陀信仰 (cult) の存在を示すものであるが、この經典に現われる空思想に裏付けられた念仏思想は、実は『無量寿経』などに見られる、臨終に体験する見仏を実際のできごと (actual event) と捉える立場への批判を意味するものである、と論じていることである (p. 51)。

また Gregory Schopen は “Sukhāvātī as a Generalized Religious Goal in Sanskrit Mahāyāna Sūtra Literature” [26] の中で、極楽往生の思想は、大乘經典に見られる記述によれば、阿弥陀仏への信仰とは独立して存在し、阿弥陀仏と直接関わりを持たない多くの宗教的行為を通じて極楽への往生が可能であると考えられていた、と論じている。Schopen は大乘經典に見られる極楽往生の記述を数多く検討してその新説を立証している。彼の研究によると、極楽往生を説く記述は、阿弥陀仏を説かない多くの大乘經典に散在しており、またそれらは前後の文章とは関係なく突如として言及されている、という。またそれらは極楽の主たる阿弥陀仏を対象とした宗教行為 (たとえば阿弥陀仏を念じたり、その名を称えること) の結果として極楽往生を説くのではなく、八齋戒や波羅提木又 (śikṣāpada) を守ること、あるいは經典を聞き護持することなどの阿弥陀仏と直接関連のない行為の結果として極楽往生が達成されると説いている。また、Bhaiṣajyaguru Sūtra では薬師如来を称讃することにより極楽へ

の往生が得られるとも述べられている。このような記述をもとにして、Schopen は極楽往生の思想は阿弥陀信仰と独立した大乘仏教全般に通じる“generalized religious goal”である、と論じている。そして、これらのテキストを二世紀ごろから四・五世紀のものとして推察し、このような往生思想はこの時期に発生したものであるとする。

以上は近年において最も注目と値すると思われるインド浄土教に関する研究であるが、その他にもいくつかの論文が発表されている。Minoru Kiyota は45ページにもものぼる“Buddhist Devotional Meditation: A Study of the *Sukhāvativāyūhōpādeśa*” [23] において世親の『浄土論』を研究し、その内容を考察し、『浄土論』全体の英訳を施している。また Julian Pas は『観無量寿仏経』の成立過程をとりあげた“The *Kuan-wu-liang-shou Fo-ching*: Its Origin and Literary Criticism” [24] を発表している。

2. 中国浄土教の研究

中国浄土教に関する研究は近年特に目覚しく発展している。過去十年あまりの間に、以前はほとんど顧みられなかった曇鸞・道綽・善導などを専門とする研究者がアメリカやカナダに現われるようになった。浄土教の本格的研究が北米でも始まりつつある萌として大きな期待がもたれる。

まず曇鸞については、Leo Pruden は“A Short Essay on the Pure Land by Dharma Master T’an-luan” [42] という題で『略論安楽浄土義』の英訳を発表している。Rodger Corless も“Monotheistic Elements in Early Pure Land Buddhism” [32] において、曇鸞の浄土教と一神教を比較している。Corless は曇鸞の主著、『浄土論註』の英訳をウイスコンシン大学に学位論文として提出しているが、未だ出版には至っていない(T’an-luan’s Commentary on the Pure Land Discourse: An Annotated Translation and Soteriological Analy-

sis of the *Wang-shêng-lun chu* T.1819)。『論註』の英訳が出版されることになれば、欧米の浄土教研究も大きく躍進することは疑いないことであるので、近くそれが実現されることを期待する。

David Chappell の “Chinese Buddhist Interpretations of the Pure Lands” [31] は、その題より知られるとおり、中国における浄土の概念の展開を、道綽のそれに中心を置いて考察した論文である。そこではまず僧肇の『注維摩詰經』に説かれる浄土観から出発し、浄影寺慧遠（『大乘義章』・浄土義）や天台智顛（『維摩義疏』に見られる四種浄土説）を考察した後、道綽の『安樂集』に見られる浄土について詳しく論じている。

また Leo Pruden も天台智顛の浄土思想に興味を示し、智顛の名のもとに偽作された『浄土十疑論』の英訳を出している (“Chih-i’s *Ching-t’u Shih-i-lun: Ten Doubts Concerning the Pure Land*” [41])。この英訳の序論ではその作者や内容について検討されている。

中国浄土教の中心的人物である善導についても近年多く注目されるようになり、アメリカやカナダで彼の伝記や『観經疏』の研究により博士号を得た学者が数人いる。しかし残念ながらその研究成果はあまり論文や著作として発表されていない。その中で Julian Pas は “Shan-tao’s Interpretation of the Meditative Vision of Buddha Amitāyus” [40] という論文を発表している。これは『観經疏』の定善義についての研究である。彼によれば、『観經』は複数の著者による經典で、その本来的部分は禪定を中心とした部分であり、二次的に極楽往生のための倫理的精神的条件を説き、最後にほとんど偶発的に称名念仏が説かれてある、とする。そこでこの經典の本来的部分についての善導の解釈を考察するために定善義をとりあげる、というのがこの論文のねらいである。

先に善導についていくつかの博士論文が提出されていることを述べたが、こ

ここにそれらについて一言しておこう。Ingram Seah は *Shan-tao, His Life and Teachings* という論文で1975年に Princeton Theological Seminary より博士号を得ている。これは主に善導の伝記を研究したもののようであるが、最後の100ページでは善導教学の概要が示されている。また Nobuo Haneda はウイスクンシン大学に *The Development of the Concept of Pṛthagjana Culminating in Shan-tao's Pure Land Thought* と題した論文を1979年に提出している。これは善導に至るまでの凡夫観の展開を研究したものである。ちなみに Pas の博士論文、*Shan-tao's Commentary on the Amitāyur-Buddānusmṛti-sūtra* は1973年、カナダのマクマスター大学に提出されたものである。

明代の株宏（雲棲和尚）の浄土思想については Leon Hurvitz が “*Chung's One Mind of Pure Land and Ch'an Buddhism*” [36] を発表している。この論文は Wm. Theodore de Bary の編集による明代の思想の諸相をとりあげた論文集、*Self and Society in Ming Thought* に収録されているものである。これは主に株宏の『仏説阿弥陀経疏鈔』をとりあげた論文で、中国仏教における禅と念仏の融合思想を英文で研究した稀な作品として注目すべきものと思われる。

3. 親鸞以前の日本浄土教の研究

浄土教は日本仏教の中の中心的位置にあるものとして多くの研究がなされている。後の文献目録の中でも約七割の論文・著作が日本の浄土教をとりあげたものである。このことから、いかに日本の浄土教に対して興味が持たれているかが知られよう。

源信の『往生要集』は従来日本浄土教の発展の上で特筆すべき書物であるとされてきたが、英文では Allen Andrews によって *The Teachings Essential for Rebirth: A Study of Genshin's Ōjōyōshū* [45] という研究が出版されている。この

中では『往生要集』全体が、その念仏思想を中心に、詳しく研究されている。Dennis Hirota は鎌倉時代後期に編集された『一言芳談』を英訳している [51・52]。これは平安、鎌倉時代の34人の念仏者の言葉を伝える興味深い書物である。Hirota はまた 6 回に渡り、The Eastern Buddhist 誌に『一遍上人語録』を英訳している [136—141]。

4. 親鸞についての研究

親鸞を開祖とする浄土真宗は、日本の仏教あるいは宗教の代表的一例として多くの外国の研究者の注目を浴びている。欧米人の親鸞研究の中で筆頭にあげなければならないものは Alfred Bloom の *Shinran's Gospel of Pure Grace* [55] であろう。この著作は約二十年前 (1965) に出版されたが、今日においてもなお欧米人による親鸞の思想に関する研究書としては唯一のものである。親鸞の浄土思想は概ねこの本を通じて欧米に紹介され理解されているのである。なお最近この本の和訳が出版されたことも付加しておきたい (アルフレッド・ブルーム著、藤沢正徳・林信康・野村伸夫共訳『親鸞とその浄土教』京都：永田文昌堂，1983)。

この本は、自力によって自己の救済を獲得することは不可能であるとし、他力の立場に立った宗教家として親鸞をとらえ、考察を進めている。本書は八章よりなるが、その内、初めの二章では浄土三部経と七祖の思想の概要を説明する。次の第三章では、末法時代においてはいかなる修行も自己の救済を保証することはできず、信——それも人間によって為されるものではなく、仏によって人の中に為される信——が救済の必須条件であるとする人間観を論じている。第4・第5章ではこの信について考察し、それが阿弥陀仏から人への賜わりものであることを強調している。また第6章では、信心を得た人は正定聚に住すという点、第7章では信者の報恩の念仏、について論じ、第8章の“The

Believer's Destiny” で本書は閉じられている。

Bloom はこの他に親鸞の生涯を詳しく紹介した長編の論文も発表している [78]。また真宗の現代的意義を追求した論文も 2・3 ある [77・79-80]。さらに最近 *Tannisho: A Resource for Modern Living* [56] という、『歎異抄』全篇に渡る解説書を著わしている。本書は苦悩の中に生きる現代人にとって『歎異抄』は大きな意義を持つ、という立場から書かれている。このような意味で *Resource (資源) for Modern Living* という題が付けられているようである。この中で著者は egoこそが人間の苦悩の根源であるとして、親鸞の教えこそ真の無我 (true egolessness) を示すものであるとする。そしてそのような真の無我は自己の不完全で束縛された姿 (imperfection and boundedness) に目覚め、同時に、それにもかかわらず、深い慈悲に支えられている事実を感知する時に起きるのであると論じている (p. 29)。特に興味深く感じたことは、宗教的実践が利己的な利益や功德を求めてなされる時、その行為は仏教の目指す無我到達するという目的と矛盾するが (p. 28)、他力を基本とする行はこの矛盾を克服するものである、と述べている点である。このように『歎異抄』を ego 否定という点から見てゆく Bloom の中に、ego 中心に発展してきた西洋文化のゆきづまりを感じている欧米人の精神的要求が見られるようで、興味深い。

また今年、インド仏教の研究者として著名な Luis Gómez により親鸞の浄土教について重要な論文が出されている。“Shinran's Faith and the Sacred Name of Amida” [86] と題されたこの論文は、西本願寺の Hongwanji International Center より出版された『尊号真像銘文』の英訳 *Notes on the Inscriptions on Sacred Scrolls* [70] についての書評である。この十二ページにも渡る書評の中で、Gómez は独自の宗教観・仏教観にもとづいて、親鸞の浄土教理解について論じている。難解な点も少なくないが (もっとも長い文章であればこれらの点も十分に説明され、理解しやすくなると思われるが)、親鸞の思想

を新しい観点から考えているので注目に値する。これは今日までの欧米人による真宗関係の論文の中で、最も読みがいのあるもののひとつである。

Gómez は『教行信証』の中に流れる統一原理は「廻向」であり、それは本願を有効にさせる宗教的法則であるとする。さらにこの法則が現に働くのは「名号」としてであるという。そこで、なぜ名号が真宗で重視されなければならないのか、という問題をとりあげ、独自の名号論を展開している。彼によれば、本願は約束のユニークな、あるいは原型的な例であり (unique or archetypal instance of a promise p.75), その効果は約束者 (つまり阿弥陀仏) の信頼性や功德にのみ依存している。つまり、正覚を開いた者は、自己の無限の功德を、いわば担保 (collateral) として衆生に解脱を保証するのである。そしてその本願として表現された解脱の保証は仏の名前に具体化されてのみ、衆生に受け入れられるのであり、そのため救済の根源・意義・方法などは約束によって最も適切に表現される、というのである。この名号論の他に親鸞の浄土教学の多くの点に言及しているが、原型 (archetype) として法蔵菩薩を位置付けていることは (p.77) 大きな示唆を与えてくれるものである。さらに「信心」の訳語に触れて、訳者がそれを英訳せずに “shinjin” とローマ字にして用いていることに対して、訳者がキリスト教の faith の概念と真宗の信心のそれとの混乱を避けるために信心を faith と訳さず、あえて shinjin としたことはよく分かるとしながら、信心は faith の一般的概念の一例であり、その事実を大胆に、かつ明白に受け入れることにより、信心そのものもより明確に理解できるであろう、と述べている。また、この Gómez の書評に対して Monumenta Nipponica (vol. 38, no. 4) において上田義文と Dennis Hirota 両氏の反論と、この反論に対する Gómez の反論が掲載され、活発な論議が行われている。これは重要な問題を提起しており、今後より深く考えなければならない課題である。

5. 親鸞以後の真宗についての研究

1970年代の後半ごろから急速に蓮如についての研究成果がアメリカで発表されるようになった。Stanley Weinstein の“Rennyō and the Shinshū Revival” [125] は蓮如の業績を真宗教団史の中に位置付けた論文である。また Paul Ingram も“The Teachings of Rennyō Shōnin: the Life of Faith” [111] という論文を発表している。しかし最も精力的に研究を行っているのは Michael Solomon と Minor Rodgers の両氏である。宗教学の立場に身を置く Rodgers は蓮如の宗教家としての面に注目し、真宗の教学発展の上での蓮如の位置づけを研究主題としている。その一例として彼の“Rennyō and Jōdō Shinshū Piety: the Yoshizaki Years” [114] が挙げられる。また彼には蓮如の信心観を現代の宗教学者 Wilfrid Cantwell Smith の方法論と照らし合わせて考察した論文“The Shin Faith of Rennyō” [115] もある。一方、歴史家の Solomon は主に真宗の教団史を、蓮如に焦点を当てて研究している。その中で真宗教団内における権威の相伝について論じた“Kinship and the Transmission of Religious Charisma: The Case of Honganji” [117] や、真宗教団と政治権力との関わりをとりあげた“The Dilemma of Religious Power: Honganji and Hosokawa Masamoto” [118] などは注目されている。

また鈴木大拙の影響もあろうか、妙好人についても徐々に研究が行なわれている。その中でも、チベット仏教研究者として知られている Leslie Kawamura は“The Myōkōnin: Japan’s Representation of the Bodhisattva” [112] を発表している。これは菩薩の特徴を四点にまとめ、これにもとづいて、妙好人は日本人における菩薩の理想を代表するものであると論じたものである。

近代真宗教学に対する関心も徐々に高まっているようである。James Heisig は清沢満之の「絶対他力の大道」を英訳している [131]。彼は満之の原文を大

胆に意識し、いきいきとした英文に翻訳することに成功している。坂東性純も清沢満之の「絶対他力の大道」と「わが信念」を英訳し [129]、*The Eastern Buddhist, New Series* 誌に発表している。ちなみに、曾我量深や金子大栄の文章も *The Eastern Buddhist, New Series* 誌に紹介されている [133・132]。

近頃、キリスト教と仏教の比較研究が多くなされている。これは両者の間に対話 (dialogue) を求める人々が多くなってきたからである。一般的に、この両者を比較したり、対話がなされる時には、仏教側では主に禅が中心であったが、キリスト教と浄土教・真宗の比較も、少ないが見ることができる。スイスの神学者 Fritz Buri の “The Concept of Grace in Paul, Shinran and Luther” [82] は興味深いものである。また土居真俊は浄土と神の国という二つの概念について詳しく考察した “The Pure Land and the Kingdom of God” [6] という論文を発表している。

6. 日本国内における英文浄土教研究

最後に日本国内において浄土教研究の成果を英文で発表している主な研究機関を簡単に紹介しておこう。まず竜谷大学の Ryukoku Translation Center がある。ここでは Ryukoku Translation Series という親鸞の著作などの英訳シリーズを出版している。1962年以来6冊の英訳を出している [57-61・64]。欧米の人々でこのシリーズを通じて真宗に接した者は少なくない。次に西本願寺の Hongwanji International Center は Shin Buddhism Translation Series を出版している。これもまた親鸞の著作を英訳して世界に送り出すことを目的としたシリーズである。1978年に『末灯鈔』の英訳を出してから、毎年1冊ずつ本を出版している [67-71]。このシリーズは英訳そのものもよいが、各冊に真宗用語の詳しい glossary が収められており、欧米の研究者のあいだでは高く評価されているようである。さらに鈴木大拙によって創設された The

Eastern Buddhist Society は、年二回、機関誌の The Eastern Buddhist, New Series 誌を発行している。この雑誌は禅関係の論文が中心をなしているようであるが、浄土教関係の論文もかなり掲載している。先に述べたように、清沢満之・曾我量深・金子大栄などの文章もこの中で紹介されている。その他、上でとりあげた論文の多くもこの雑誌のページに収められている。このように The Eastern Buddhist, New Series 誌が欧米への浄土教・真宗の紹介や普及に果している役割は大きいといってよいであろう。